

特257

944

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其二十三)



始



特 257
944



臨濟宗
建長寺
管長

菅原時保禪師

巖錄講演

(其二)



碧巖錄講演 其二十三 目次

第六十二則 雲門中有一寶……………一頁
第六十三則 南泉斬却猫兒……………二二頁
第六十四則 趙州頭戴草鞋……………四五頁
第六十五則 外道良馬鞭影……………六二頁

巖碧錄提講

第六十二則 雲門中有一寶

◎垂示

垂示云、以無師智、發無作妙用、以無緣慈、作不請勝友、
向一句下、有殺有活、於一機中、有縱有擒、且道、什麼人
曾恁麼來、試舉看、

讀方

垂示に云く、無師の智を以つて無作の妙用を發し、無緣の慈
を以つて不請の勝友を作す。』一句下に向つて、殺あり活あり

り、一機の中に於て、縦あり擒あり。』且く道へ、什麼人が曾て恁麼にも來りしぞ。試みに擧す看よ。』

字解。

無師智、』天來の智慧、本具の靈光。天才と云ふに相似て然らず。佛教に三智、四智と云ふことがある。三智とは左の如し。

- 一切智——是は聲聞、緣覺の智
 - 道種智——是は菩薩の智
 - 一切種智——是は佛陀の智
 - 世間智——是は凡夫外道の智
 - 出世間智——是は聲聞、緣覺の智
 - 出世間上々智——是は佛、菩薩の智
- 以上は大智度論の説
- 以上は楞伽經の説

- 一切智
 - 佛智
 - 自然智
- 以上は法華經の説

四智とは

大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

右の三智、四智は何人と雖も天然に具足して居る。得、不得は修行の如何によるものと知るべし。

無作妙用、』天然の道理、自然の法則、それに契合したる、それが無作の妙用である。大悟底の人の動作は總て無作の妙用ならざるなし。

無緣慈、』茲に三種あり。曰く、衆生緣慈悲。是は四海同胞主義。曰く、法緣慈悲。是は聖人賢人其の人が社會の人を教化する愛。曰く、無緣慈悲。是は盡法界の總てを撫育する絶對の愛。作不請勝友、』依頼や懇望を待たずして自ら進んで社會人類の爲に教化善事をなすこと。例せば釋迦の如し。孔子の如し。又はキリストの如し。何れも不請の勝友である。勝友とは偉人の別名と知るべし。

勝友につき、井上君が古人の文句を引證された。それを拜借して諸君と共に翫味致しませう。

維摩經、佛國品に、衆人不請、友而安之。

勝鬘經、不請之友云々。——僧肇曰く、眞友不待請、譬慈母之赴嬰兒也。

無量壽經、不請之友、等以上。提講。

世の中の事は、大小を論ぜず、師に随つて學び師の教導に依りて進歩もし向上もする。然るに禪は寄るべき師なし。學ぶべき經なし。師は自己を以て師とし、學ぶは自己を以て經となす。黃檗禪師曰く、「禪なしとは云はず只是れ師なし。」と。千古の格言である。

師に依つて修し師に随つて學び得たる智、是を有師の智と云

ふ。無師の智は然らず。自己自身が坐禪三昧に入り、冷暖自知したる、それが無師の智にして、眞箇の大智である。此の無師の大智にあらざれば、無作の妙用を發展することは出来ぬ。苟も佛教家たるもの、特に禪僧は大悟一番、無師の大智を豁開し、而して接化度生せざれば、動靜云爲、總てが有作の妄作。自己を誤り、併せて他を誤る。

無作の妙用、次の無縁の慈より有縦有擒と云ふに至る迄が無作の妙用、その一斑である。

無作でなければ無縁の慈は行はれぬ。無縁の慈でなければ、不請の勝友にはなれぬ。不請の勝友になれなければ、殺も有作の

殺、活も有作の活。縦も擒も亦復然りである。無師の智より發揮したる無作の妙用であれば、敢へて殺活縦擒に限らず、所謂心の欲する處に随つて矩を超えず、常に恒に心の祖たることが出来る。——果して恁麼の人ありや。あるく。雲門禪師の如きが其の一人である。本則に實參して無師の智、無作の妙用を證得すべし。

從容錄に左の如き垂示がある。参考の一助に添へておきます。

得游戲神通大三昧、解衆生語言陀羅尼、拽轉睦州秦時輞轡鑽、弄出雪峰南山鼈鼻蛇、還識得此人麼、とある。

得游戲云々、『禪家本分の衲僧は、或時は佛界に行き、或時は

魔界に入り、地獄、天堂、如何なる處たりとも無作の妙用を遊戯三昧に躬行するのである。

解衆生云々、『無師の智でなければ、一切衆生の東語西話、南笑北泣、それらの陀羅尼を解得することが出来ぬ。故に先づ以て無師の智を豁開すべきである。』

拽轉睦云々、『雲門禪師、睦州禪師の處に於て無師の智を豁開された由來。』

弄出雪云々、『雪峰禪師、大衆に向つて、南山に一條の鼈鼻蛇あり云々。それに對し、雲門禪師は拄杖を以て雪峰禪師の面前に擲向して怕るゝ勢をなせしことがある。以上の活行履くわつらんりを所持

して御座る雲門禪師こそ無師の智を以て無作の妙用を自由自在に活轉せらるゝ人であることを證明したのである。

◎本則

擧、雲門示衆云、乾坤之内、宇宙之間、中有一寶、秘在形山、拈燈籠向佛殿裏、將三門來燈籠上。』

讀方

擧す。雲門、示衆して云く、「乾坤の内、宇宙の間、中に一寶あつて、形山ぎやうざんに秘在ひざいし、燈籠を拈ねんじて佛殿裏に向ひ、三門を將いつて燈籠上に来る。」
字解。

乾坤、天地のこと。——宇宙、宇は上下四維の空間、宙は今來古往の時間。——中、必ずしも中間に限らず、乾坤宇宙に充滿すると見るべきである。——一、寶、人の最も懇望する處のもの。それは如何なるものか。——秘在、潛在、包含。——形山、佛者の術語で、肉體のこと。——佛殿、佛の像を安置したる處。——三門、三解脱を表す。中央の大入口と左右のくゞりの小入口と、大小三つの入口があるのが本當である。(三解脱は法身、般若、解脱。)又山門とも云ふ。是は何々山の入口と云ふ通俗の意である。

分解は略す。

提講。

乾坤の内云々の語は僧肇の寶藏論に在る語で、雲門禪師創作の語にあらず。『寶藏論のことは前に一寸述べた様に思ふが、序であるから申し添へて措きます。』僧肇が秦王の刑に遭うて殺されんとする其の時、七日の暇を請うて寶藏論を著述された。其の論の中に、乾坤の内云々と云ふ語があるとのこと。(衲は寶藏論と云ふ名は聞いて居るが、一回も拜見したことはない。)いよく殺さるゝ時に、「四大元無主、五陰本來空、將頭臨白刃、猶似斬春風。」と一偈を唱へて刑刃を受けられたと聞く。

乾坤の内云々の意味は讀んで字の如く何人にも一讀分明、故に説明する必要なし。されど着目すべき處は一寶、それである。果して然らば一寶とは畢竟如何なるものか。——眞如か、佛心か、菩提か、涅槃か、又は實體か、絶對か。其の名稱々ありと雖も期する處は、不生不滅、不垢不淨、不增不減の本來心、それである。蓋し當らずと雖も遠からず。

一日、雲門禪師、會下の大衆に向つて、「將に刑刃を頭に受けんとするに臨み泰然自若として一偈を高唱し最後を遂げられた肇法師が、乾坤の内、宇宙の間、そこに一つの珍寶がある、その珍寶は吾人の肉體に潜在してをる、と云はれたが、果して吾

人の肉體に左様なものがありや否やを究明して見るも敢へて無駄ごとではない。寧ろ焦眉の急務である。サアどうだ。」と云はれたが、一人として是に對して答ふる者なし。故に禪師、其の一端を拈出して曰く、「毎朝未明に起き提行燈をさげて佛殿に出頭して讀經するのも、お互所持の珍寶。——三門を隻手に捧げ、隨縁赴感、諸々に談論笑話するのも、お互所持の珍寶。」と。

雲門禪師は無師の智を以て無作の妙用を發揮し、無縁の慈を以て不請の勝友となり、一舉手一投足、その場々で或は殺し或は活かし、又は縦ち又は擒ふ。其の大自然、其の大自然、可謂、雲門以前に雲門なし、雲門以後に雲門なし。蓋天蓋地、

雲門禪師、只一個の珍寶あるのみ。――

例の圓悟禪師、此の所に下語して曰く、「仔細に驗點し來れば未だ免がれず自尿の臭きを。」と。仔細に驗點せずとも自尿の臭きは免がれぬ。――されど自尿の臭きを振りまはすだけの確信はある。當今の人は沈香も焚かず、默然として有機の死人。本來所持の珍寶を如何にせしや。時、得がたし、失ひ易し。時は今なり、今は時なり。之是の好時を失する勿れ。斯く老婆言を弄するは衲が無師の智を以て、無作の妙用を活轉して居るのである。笑ふ勿れ、自尿の臭きを知らずと。――

◎頌

看々、古岸何人把釣竿、雲冉冉、水漫々、明月蘆花君自看、

讀方

看よ看よ、古岸には何人か釣竿つりかんを把れり。雲は冉冉せんたり、水は漫々まんたり。明月蘆花、君自ら看よ。』

字解。

冉冉は雲の風に任せて無爲に浮んで居る景況。
漫々は水の高低に任せて無作に流れ居る様子。
分解の必要なし。

提講。

飯田師は提唱して云く、「此の則は碧巖錄中の難則。故に眞箇

因地一下の難關を経たる者でなければ透過は思ひもよらぬ。只是れ看よ看よぢや。」と。或は然らん。由來公案に難、不難はない。難、不難は修業者その人にある。飯田師は看よ／＼と有難さうに云はるゝが、圓悟禪師は、看るを用ひて什麼せん、と云うて居らるゝ。

以上兩人の着眼點、果して雪竇禪師の看よ／＼を勘破せしや。看よ、看よ、——必ずしも看よ／＼を難透視するに及ばず。軽く看よ／＼と下の古岸云々の句をさしたのである。古岸とは何れの處か。何人とは誰のことか。看よ／＼だ。——古岸と云うて新に對する古岸ではない。何人と云うても他人ではない。

雲門禪師が肇法師の句をかりて、性海の金鱗を釣り出そうとなさる、それが、——古岸何人把釣竿。——それも一寶。

——一寶はまだある。雲の冉々も一寶、——水の漫々も一寶。——明月蘆花も一寶。見聞覺知、總て是れ一寶。——

盡十方法界、由來一寶の外にあらず。その妙處を知らんと欲せば、自己自身の心眼を豁開し、自己自身で看るべし。故に雪竇禪師、君自ら看よ、と老婆してをらるゝ。『圓悟禪師曰く、「若し雲門の語を識得せば雪竇禪師の最後の句が見える。」と。如何にも然り。されど眞箇の妙處は言葉通りにさうお手輕に得らるゝものではない。苟も眞箇の妙處を得んと欲せば、先づ以て、蘆花

が蘆花を見、明月が明月を見る、その無作の妙用を徹底的に我がものにすゝでなければ、徒に隣の寶を數ふるのみ。——我に於て何の用をか作さん。——閑話休題、君自ら看よ。——從容錄には此の則を頌じて、

收卷餘懷厭事華、歸來何處是生涯、爛柯樵子疑無路、桂樹壺公妙有家、夜水金波浮桂影、秋風雪陣擁蘆花、寒魚著底不吞餌、興盡清歌却轉槎、』

とある。知るべし一寶の隨處に轉々することゝを。

第一句の意は、寶藏論の中の或部分を收卷して（乾坤の中云々）事華を厭ふ、で、其の餘は一切、茲に引用せず、是れも一寶

の活用。——

第二句の心は、歸家穩坐の境致。「世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門に波風はなし。」是れも一寶の流露。——

第三句の主意は雲門禪師の手段を示す。

昔、王質と云ふ人、一日、山へ薪を取りに行く。二人の童子が面白さうに黑白を争うて居る。王質、薪のことを忘れ夢中になつて見て居ると、童子が珍らしき木の實を呉れた。それを喫してをると腹がすこしも減らぬ。暫くして一局の勝負がついた。王質、歸らんとして持し來りし斧を見ると、其の柄すでに腐れり。驚いて家に歸り見れば數十年を経て居つた。——是れも

一、寶の所作。

第四句の眼目は雲門禪師の家風を表す。

昔、費長房と云ふ人が藥賣の壺公に送られた壺の中へ入つて見ると別乾坤があつた。中に立派な宮殿もある。『是れは何を諷したもののか。一寶の外ではない。』

第五句、第六句、此の二句は雲門禪師、爲人度生の端的を釣船に比し、以て一寶の運用底を明にす。

第七、八の二句は、讀んで字の如く別に説明を下す必要なし。一言以て是を覆へば、雲門禪師の燈籠を拈じて佛殿裡に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す、その變調である。——何れに

しても一寶を離るゝことは出來ぬ。——サアお互は一寶を如何に使用すべきや。往到水窮處、坐看雲起時。——

(昭和十四年五月六日購演)

第六十三則

南泉斬却猫兒なんせんざんせきうけうじ

◎垂示

垂示云、意路不到、正好提撕、言詮不及、宜急着眼、若也
電轉星飛、便可傾湫倒岳、衆中莫有辨得底麼、試舉看、

讀方

垂示に云く、意路到らざる所は、正に好し提撕するに。言詮
及ばざる所は、宜しく急に眼を着くべし。』若し也電轉じ星飛
せば、便ち湫を傾け岳を倒すべし。』衆中辨得する底有ること
莫しや。試みに舉す看よ。』

字解。

意路不到、』人智を以て思量分別し得ざる處。

正好提撕、』意路不到の處こそ提撕する價值がある。提撕は提
唱、學者を導く手段。

言詮不及、』言語文字では不可能である。

電轉星飛、』電の如く早く轉じ星の如く速かに飛ぶと云ふ意
なり。

傾湫倒岳、』越格の活動底を云ふ。湫は淵と見るべし。

提講。

普通人の思量分別、言語文字には限りがある。如何に思量分

別を用ひ如何に言語文字を使うても如何ともなし得ざる處を意路不到と云うたのである。此の意路不到の處が妙處にして風味のある處。故に苟も禪僧たる者は此の意路不到の處を思ふがまゝに人前に提撕するでなければ眞箇の禪僧とは云へぬ。無論そこは言詮不及であるから、言語文字を相手にせず、如何にしたら絶對の大眞理を横拈倒用なし得らるゝかと云ふ處に着眼しなければならぬ。——幸に言詮不及の處に着眼し意路不到の處を提撕し得れば、其の大機大用は隨處隨時に電の如く轉じ星の如くに飛ぶ。傾湫倒岳、何の難きことかあらん。之是を稱して全智全能の神、之是を三明六通を得たる佛と云ふ。——サア大

衆、神になり佛に代り、三明六通を活用し、全智全能を發揮する底の漢ありや。有無は暫くおき、古人に意路不到、言詮不及の處に於て電轉じ星飛び傾湫倒岳をなされた人があるか。試みに舉揚す。雙眼を洗ひ來つて能く見るべし。』從容錄に左の如き示衆があります。初學者の爲に添へておきませう。

示衆云、

踢翻滄海、大地塵飛、喝散白雲、虛空粉碎、』嚴行正令猶是半提、』大用全彰如何施設、』

大意は、意路不到の處を提撕し來り、言詮不及の處を吐露し去る底である。

滄海は大海のこと。踢翻は蹴倒すること。

大海を蹴倒せば大地も併せて塵となつて飛ぶ、とは如何にも奇抜である。

白雲は雲のこと。喝散は喝破すること。

白雲を喝破すれば虚空も共に粉となつて碎ける、とは實に大用である。

或人は云ふ、「大地は有の見、虚空は無の見。有に執着するも迷ひ、無に固執するも迷ひ。有無の迷執を踢翻し喝散することである。」と。精神上から云へば或は然らん。「されど敢へて精神上に轉用するに及ばず。文字の上から見ると、滄海を踢翻し

白雲を喝散する、とあるから尋常底でなき様に思ふが、實の處は、お互の毎日々々坐臥進退、喫茶喫飯、それが其のまゝ滄海の踢倒であり、白雲の喝散である。——正令を嚴行すれば猶

これ半提。正令とは佛法の正しき法令。正しき法令とは第一義。

その第一義より驗點し來れば、以上の如き神通妙用に似たる動作は悉く半提である。苟も全提を舉揚せんと要せば、意路の到らざる處、言詮の及ばざる處に於て、瓦礫を拈じて黄金となし、黄金を拈じて糞土となす底の腕力が無ければ大用全彰はせぬ。

如何にしたら大用全彰する。去つて本則に參ぜよ。右は從容録の示衆。

◎本則

舉、南泉一日、東西兩堂爭猫兒、南泉見、遂提起云、道得即不斬、衆無對、泉斬猫兒爲兩段、

讀方

舉す。南泉一日、東西の兩堂、猫兒を争ふ。南泉見て遂に提起して云く、「道ひ得ば即ち斬らず。」衆、對なし。泉、猫兒を斬つて兩段と爲せり。」

字解。

東西兩堂、「支那禪寺の建物には東西に禪僧の寄宿所がある。其の東西兩方の禪僧が一匹の猫兒につき争論を起した。それが

次の句の

争、猫兒、」である。猫兒の牡か牝かを争うたのか、——東堂の猫兒だ、西堂の猫兒だ、それを争うたものか、——何れが是なるかは其の當時の人でなければ不明である。今は争ふことより南泉禪師の大機大用に着目すべきである。

遂提起、「東西兩堂の僧が一匹の猫兒の爲に大争論をして居る。それを南泉禪師が見兼ねて、争論の原因たる猫の兒をツマミあげたのである。

道得即、「自己の悟得したる一句を云うて見よ。——
爲兩段、」二つにした。

分解の必要なし。故に省略。
提講。

南泉の普願禪師は馬祖大師の法嗣、達磨九代の孫である。」或日、東西兩堂の學僧共が一匹の猫兒を目標として大爭論を戦はしてゐた。』其の爭論の意旨を忖度するに、南泉禪師が平時、三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有、と云はれた、それに起縁してをるのか、又は涅槃經に、一切衆生悉有佛性、とある、それに原縁して居るのか、事實は知れぬ。——まさか赤猫であるの、三毛猫であるの、牡であるの牝であるのと云ふ争ひではあるまい。——兎に角、兩堂の僧等、總動員で猫兒につき大論戦を

展開して居たことは實際である。

大内君は、「猫に事寄せての佛法上の争ひであつたらうと思はれる。」と云うて居らるゝ。尙云く、「それならば南泉門下の坊さんには限らない。佛在世の頃から今の世に至るまで、諸宗各派で念佛だの題目だの坐禪だの觀法だのと争ひの絶えたことが無い。畢竟何れも本源を忘れて支派に走つた妄想分別ばかりである。」と喝破されたが、如何にもである。心外に法を求めたり語つたりした處で自己に對して何の所益がある。總て是れ粕妄想にして閑葛藤である。現今はお互に文化だの文明だのと云うて居るが、何れも心外に法を求め又心外に爭論を戦はして居る人

が多い。南泉門下の猫兒を争ふ僧を見て笑ふは蓋し自己を笑ふのである。

されど、争ふと云ふこと、論ずると云ふこと、一概に輕視すべきではない。争ふも論ずるも進歩發展の原因である。見よ三世の諸佛も歴代の祖師も、要するに何ものかの争ひから發心もすれば修行もし、菩提涅槃を證得せられたのである。故に争ふべき時に臨んでは徹底的に争ひ、論ずべき時に當つては徹底的に論ずべし。

南泉禪師は兩堂僧の争ひを見て、遂に其の猫兒を奪ひ、高く提起して云く、「道ひ得ば即ち斬らず。」是れは垂示にある意路

不到の處に向つて電轉じ星飛ぶ傾湫倒岳の提撕である。『南泉禪師の、道ひ得ば即ち斬らず、を平易に語らば曰く左の如し。

「一體、諸君は他の信施を受け修業して居るのは何の目的か。

自己の本分を忘れ、馬鹿にもほどがある。子供ではあるまいし、猫兒一匹を捕へて愚にもつかない粕妄想を戦はして、それが何になるか。サア只の一言でよい。此の南泉の心に契ふことを道うて見よ。——其の一言が見事本分の事に適中すれば、此の猫兒を斬り殺さずに助けてやる。若し適當したる一言を吐き得ざれば、氣の毒だが此の猫兒を斬り殺し去るぞ。サアく。」と。

此の處へ圓悟禪師の著語に、正令當行、十方坐斷、と。即ち南

泉禪師は法王宣戰の詔勅を發せられた、と托上し、又、此の老漢、龍蛇を定むる手脚ありや、と抑下した。是れは圓悟禪師の電轉星飛である。』サア道へサア道へと云はれても、衆、對なし。誰一人として道ひ得るものが無い。昔も今も同様、妄想分別の粕議論や閑言語はわれもく、で先を争うて喃々するが、いよくと云ふ極處に至ると一言半句も出ない。』——諸君も覺えがありませう。衲も覺えがある。出るものは汗ばかりだ。意路不到の處に面して、自由自在に語りもし働きもするでなければ、何の爲に修行したのか更に意義はない。圓悟禪師、衆無對の處へ、可惜放過。残念なことをした。好機を失した。一隊の漆桶、堪

作「什麼」。西瓜の展覽會の様に五十人も百人もゴロくして居るばかりで何の役になるか。總て是れ杜撰の禪和、衣架にあらざれば飯囊だ、と抑へ且つ罵倒された。』如何に抑へられても罵倒されても、論より證據、本分の事に對しては閉じた口は開けぬ。——諸君お互は如何に。猫兒を提起して、サア道うて見よ、と突きつけられた其の時、——徒に猫兒の悲鳴をなす勿れ。——俊鶻遼天呈羽翮、金毛出窟振全威、ではどうか。——遂に泉は猫兒を斬つて兩段となす。猫こそ迷惑千萬。されど兩堂の衆に代り南泉禪師のお手にか、つて往生したは、野良犬に噛み殺されたより名譽の至りである。君言、汗の如く、

法令も亦復然り。道ひ得ば斬らず、道ひ得ざれば斬るは當然。斷すべきに當つて斷ぜざれば却つて其の禍を招く。流石は南泉禪師だ。意路不到、言詮不及の處に於て一刀兩段なされたは實に見事である。可謂、輪劍直衝龍虎陣、馬喪人亡血滿田、』と。

南泉禪師は釋迦の子孫でありながら殺生罪を犯したなぞ、かれこれ理窟を並べたり議論を戦はず人があるが、口は是れ禍の門、口を開けば膽が見える。南泉禪師になれ。南泉禪師になれば其の意、自ら分明になる。燕雀何ぞ鴻鵠の心中を知らんや。斬つて兩段となす。そこに、圓悟禪師、双手を舉げて共鳴して曰く、「快哉々々。」と。更に云く、「此の如くならざれば盡

く是れ泥團を弄する漢。」と。圓悟禪師、南泉の斬猫兒底が頗るお氣に入つたと見える。『衲も南泉禪師の斷すべきに當つて斷ぜられた快舉に大々の賛成を表す。因つて思ふ、今日の爲政者、特に外交當局者は是非とも南泉禪師を學ばざるべからず。徒に他の毀譽を氣にかけ、呶りに笑罵を思ひ、云ふべきことを云はず、行ふべきことを行はざるは所謂、公事を輕んじ私事を重んずるのである。苟も其の職に住し其の任に當らば滅私奉公は當然である。當然であることを爲さざるは、衣食の爲に其の職を汚し其の任を貪る愚劣漢と云ふべし。聊か南泉禪師の筆法を學んで苦言を呈した次第である。』

◎頌

兩堂俱是杜禪和、撥動煙塵不奈何、賴得南泉能舉令、一刀兩段任偏頗、』

讀方

兩堂俱に杜禪和。煙塵を撥動して奈何ともなしえず。賴に南泉の能く令を舉するを得て、一刀兩段して偏頗を任にせり。』

字解。

杜禪は杜撰のこと。其の意は馬鹿。——今は馬鹿坊主と云ふ心で杜禪和と云うたのである。』或本に、杜默は詩を作るに多

く律に合はず、故に格に合はざることを云うて杜撰となす、とある故に、杜撰の意味は拙劣、愚鈍のことである。——和は古來和尚の和と解してをる。禪和は禪那のあて字。禪の修業者のこと。——撥動煙塵、は爭論の激烈なるを形容して斯く云うたのである。猫兒一匹の爭論とは思はれぬ。是が文や詩には屢々ある。敢へて不思議ではない。——不奈何、詩は字に制限があるから斯くしたので、實は不能奈何とか不得奈何と云ふべきである、と井上君に聞きました。——舉令、は法令實行。是れが爲に爭論の煙塵は消滅した。——任偏頗、偏は不平、頗は不正、故に偏頗は一方に片寄ること。南泉の心中を忖度するに、第三

者が是と云ふも非と云ふも、それは其の人の勝手。法令實行の場合には其の様なことにかゝはつてはをられぬ。異説なり。今は略す。

分解。

第一句、兩堂僧、一人として活禪僧はない。何れも杜禪和揃ひである。

第二句、自己本分の修行を忘れ、猫兒一匹の爲に口角泡を飛ばして論戰する有様を云ふ。

第三句、幸に南泉禪師あり。猫兒を提げ、道いひ得ば即ち斬らず若し道いひ得ざれば即ち斬る、サアどうだ、と正令を下された。

それが爲に兩堂僧の目が聊か覺めた。

第四句、道いひ得ざるが爲に一刀兩段された。是で猫騷動事件は終了。

提講。

改めて提講するほどの事はない。されど例に依つて簡単に述べておきませう。

東西兩堂の雲水僧が猫兒一匹の爲に大爭論するとは愚も愚、愚の極點である。由來、雲水僧は何の爲に東堂西堂に錫を留めてをらるゝ。此の事修行の爲であらう。然るに物にも依り事にも依り、猫兒一匹の爲に自己の本分を失却して方に血を流さん

とする大なる論戦を展開するとは道理にも平仄にも合つてをらぬ。言語道斷の事を振舞ふ杜禪和である。—— 妙を説き玄を談ずるも太平の姦賊だ。況んや妙に非ず玄に非ず、我田引水の水かけ論をや。—— されど乗り出した舟、今となつては致方があるまい。誰か、—— 何人か、—— と兩堂僧、心に救助の舟を思うて居る處へ、頼たのむなるかな、南泉老大師の助け舟が出て、議論の根本たる猫兒を提起し、道ひ得ば即ち斬らず、と云はれた。獅子の一口で、入り亂れた論戦の煙塵忽ち其の形を滅し其の影を隠す。其の靜かなること林の如し。—— されど、南泉禪師の問に對して一人の答ふるものなし。可謂、眞に是れ兩堂

俱に杜禪和、と。

茲に於て南泉禪師、一言既に出づれば四馬も逐ひがたし。道ひ得ざれば即ち斬るとは云はざれども、今となつては斬らざるを得ず。故に正令嚴行、禪家本分の活人刀を以て猫兒を斬殺された。—— それを結句に、一刀兩段任偏頗、と吟じられた。

—— 南泉禪師の此の舉につき、傍に人あり、南泉禪師が將に猫兒を斬らんとする其の刹那、其の刀を抑へたら、禪師なんとしただらう。——

南泉禪師、一刀兩段してもマダ手ぬるい、なぞと云ふ人がある。何れも賊後の弓、何の役にもならぬ。—— 誰が何と云

うても乾坤吞却の南泉だ。無眼子の輩が千萬人、異口同音に下馬評をしたとて、蚊子鐵牛を咬む、で聊かも痛痒は感じない。

——直ければ千萬人と雖も我往かん。——自信が第一、正義が第一。——之是を一身、一家、一國に轉用すべし。正義と自信がなければ一身は立たず、一家は興らず、國は亡ぶ。事々物々に當面し熟慮、而して果斷すべし。——

(昭和十四年五月二十日講演)

第六十四則

趙州頭戴草鞋

此の則には垂示なし。垂示のなき理由は、一つには焼却されたが故に、二つには六十三則の續きであるが故に。若し垂示が、と思ふ人は六十三則の垂示を其のまゝ使用なさるべし。

◎本則

舉、南泉復舉前話、問趙州、州便脫草鞋、於頭上戴出、泉云、子若在、恰救得猫兒、

讀方

舉す。南泉、復た前話を舉して趙州に問ふ。州便ち草鞋を脱

して頭上に戴いて出でたり。泉云く、「子若し在りたりしならば、恰に猫兒を救ひ得たりしならんものを。」

或本には、師舉前話、問趙州、とあり。——又或本には、晚趙州外歸、泉舉似州、とあり。——又或本には、泉復舉前話、問趙州、とあります。何れも大同小異。此の本則は字解も分解も必要なし。一讀分明である。就中、聊か不審に思ふのは、草鞋を脱し頭上に戴せて出づ、是れである。此の意義は趙州其の人にして始めて知るべし。傍人がかれこれと忖度しても總て是れ無駄。——現今禪家で先輩の慣例により斯くの如しで斷定して居る、それを趙州に呈したら果して諾するや否やは疑題

である。

提講。

兩堂の雲水僧が一匹の猫兒に對して大喧嘩を展開して居る。其の時には生憎、趙州禪師は不在であつた。若し趙州禪師が在堂であつたなら猫騷動も無く、又此の公案も無かつたであらう。あつたのが幸か、なかつたのが幸か、それは何れとも云へぬ。幸、不幸は暫くおき、本則につき閑言語を下して見ませう。南泉禪師、趙州が外より歸り來るを幸に、「今日は東西兩堂の雲水僧が猫兒一匹を種に大議論を戦はしてをつた。——容易に結末がつきさうにも見えぬから、拙僧が飛び出して、議論の目

標たる猫兒をイキナリ提起して、サア兩堂の雲水僧、何とでも一句云うて見よ、云ひ得て道理に叶うたら此の猫兒を放つてやる、若し云ひ得ざれば氣の毒だが此の猫兒を斬るぞ、と嚴令した。澤山雲水は居るが、何れも杜禪和で、一人も道ひ得る者がなかつた。そこで猫兒を兩段した。其の時、貴殿が居つたら、何とするか。」——すると趙州は穿かいて居た草鞋(日本の草鞋と同じではあるまい)を脱して、頭の上にのせて出て行きました。是は抑々如何なる意旨でありませう。——帽子は頭に、草鞋は足に、と定つたもの。然るに趙州は履冠顛倒、大いに解かせぬ。然るに南泉禪師、趙州の此の横拈倒用を見て、「子若し在らば、

恰も猫兒を救ひ得たであらう。猫兒を殺さずにするだに。嗚呼氣の毒なことをした。嗚呼残念だ。」と云はるゝが、傍人の我等には趙州の所作も南泉の心も更に了解が出来ません。——されど知音同士であれば言外に其の意を得る、で、能く識得することが出来たものと見える。其の一例として、左に瀉山かきんと仰山やうざんの話語りませう。

瀉山禪師が晝寢をしてをられた。そこへ仰山が行くと、瀉山禪師が遠慮して寢返りをなされた。仰山それを見て、これは失禮、と思うて出て行かうとすると、瀉山禪師が「仰山々々。」と呼ばるゝから、「ハイ。」と云うて立ち止まると、瀉山禪師曰く、

「今衲は晝寢をして夢を見たから判断して貰ひたい。」——「宜しうござる。」スーツと向ふへ去つて何を持つて来たかと思ふと、手洗ひ水と手拭を持つて来た。サア夢の判断と云ふのは外でない。晝寢をして眼が覺めたから顔を洗ひたいと思つて居る處へ水を持つて来た。別に水を持つて来いと云はれたのではないが、水を持つて来た。これは師の心を知つて居るからである。瀉山禪師、洗面して、快い氣持だ茶の一杯も飲みたい、と思ふところへ恰度、香嚴きやうげんと云ふ弟子が来たので、瀉山禪師が、「今仰山と二人で一場の大神通を現じた。」と云ふと香嚴、「尊公方の神通は隣の座敷で能く見て居りました。」「さやうか。それなら、

お前も神通を現じて見ては。」すると香嚴、茶を容れて菓子を持つて来ました。顔を洗つて茶の一杯も飲みたいと思ふ處へ茶を持つて来た。——是れを心と心と知り合つた神通と云ふべきである。南泉禪師と趙州は或點に於て斯くの如く機々相投合したのであるかも知れぬ。——敢へて此の公案に限らず、何れの公案も、垂語なら垂語の意味、問答なら問答の主意、それを十分研究して工夫を下すべきである。然るにそれ等のことに委細かまはず、公案の外面を軽く且つ薄く見て見所を呈する人があつた。大なる心得違ひである。さうかと思ふと、公案の字義理や文句を一々質問する人があつた。是れも大なる心得違ひである。」

云ふまでもなし、禪は自己自身の修行である。故に自己自身の安心するを目的として、他の許否如何にかはらず親切に着實に眞劍に練磨すべきである。

◎頌

公案圓來問趙州、長安城裏任閑遊、草鞋頭戴無人會、歸到家山即便休、

讀方

公案圓來つて趙州に問ふ。長安城裏閑遊を任にす。草鞋を頭に戴くも人の會すること無からん。歸つて家山に到つて、便ち休せよ。」

字解、分解の必要なし。

提講。

公案圓來問趙州、兩堂の雲水僧が一匹の猫兒を相手に大論戰の幕を開いた。南泉禪師が出てきて、道ひ得ば即ち斬らず云々で一幕終了。その始終を趙州に問うて其の意見を求めた。是れ又一幕。——南泉と云ひ趙州と云ひ、何れも超人格者だ。故に長安城裏任閑遊、長安は皇帝の居處、日本なら昔の京都、今日の東京。大手を振つて大道を往來しても更に妨げはない。(南泉に重く趙州に軽く。)其の境界と云ひ其の活用と云ひ、能く殺し又能く活かし、或は與へ或は奪ふ。其の自在底、雲の如く嶺

頭にあつて閑不徹かと思へば、水の如く、岩下に流れて、太忙生。

——樹下石上よし、紅塵萬丈あむからず。

されど趙州が草鞋を頭に戴いた其の妙處を知る人は南泉禪師一人あるのみ。其の他は一人も知るものなし。(雪竇は知つて居るぞ。)知る人のなき處が趙州の趙州たる所以。——下載の清風、誰にか付與せん。——知る人なければ是非もなし。受くる人なければ是非もなし。長安、樂しと雖も久しく居る處に非ず。——途路、好しと雖も家に歸るに如かず。——家とは自己本分の家郷。家郷と云うても一定の場處はない。人間到る處に青山あり。縁あれば住し、縁なければ去る。圓悟禪師曰く、

「恁麼也太奇。」と。如何にも隨縁赴感が本當に出來れば面白きことであらう。

以上は碧巖録の話。從容錄には此の則と前の則と一則にしてある。一則にしてある其の頌に

兩堂雲水盡紛拏、王老師能驗正邪、利刀斬斷俱亡像、千古令人愛作家、此道未喪、知音可嘉、鑿山透海兮唯尊大禹、鍊石補天兮獨賢女媧、趙州老有生涯、草鞋頭戴較些々、異中來也還明鑑、只箇眞金不混沙、

右の頌を簡單に提講致します。

最初の一句、兩堂雲水盡紛拏、由來禪僧と云ふものは雲水悠

々任去來で、雲の如く水の如く、名聞や利達に心を向けず瀟々洒々然として修行三昧であるべきが本當である。故に禪僧のこゝとを雲水僧と云ふ。處が今はそれと反對で、名は雲水僧であるが實は然らず。論より實證、兩堂の僧が自己の修行を棚にあげ、猫兒一匹の爲に紛拏、ミダレ、トラヘルで方に摑み合ひをなさんと云ふ大激論、如何にも苦々しきことである。

第二句、王老師能驗正邪、南泉は王氏であるから南泉禪師のことを王老師と云ふ。兩堂の雲水僧に向つて、「道ひ得ば斬らず。猫兒のことではない、自己本分上のことにつき何なりとも一句を吐露し來れ。」是れが正邪の試験である。

第三句、利刀斬斷俱亡像、利刀は般若の智劍、——此の金剛王寶劍を以て猫兒を切斷すると共に、有形無形、盡十方法界にある一切の事物を悉く般若の眞空に投入せしめた。所謂、一劍寄天寒。

第四句、千古令人愛作家、流石は一家をなす南泉禪師だ。斷ずべきに當つて、間に髪を入れず活斷せられた處は千秋萬古の好模範。——人の敬せざるなし、人の愛せざるなし。

第五句、此道未喪、知音可嘉、此の道とは一刀兩段底。必ずしも猫兒を切斷せし、それを云ふに非ず。斷ずべきを能く斷じられた、そのことである。』世の中には人情や義理にとらは

れて將に斷すべき事を等閑に附する人が多い。その妙味を何人が傳へた。如何に賞すべき敬すべき大法ありと雖も、後繼者がなければ一時の煙火に似たり。然るに南泉禪師の禪機法脈の綿々として今日に至るまで斷絶せざる所以は趙州其の人の賜である。故に云ふ、知音可嘉、と。—— お互も趙州の如く法に對して知音底となり、能く其の法を體得し以て法輪を轉じ、下化衆生せざるべからず。

第六句、鑿山透海兮唯尊大禹』此の一句は南泉禪師を吟じたのである。既に知らるゝ如く、大禹と云ふ人は九年の間、山を切り開き洪水を海に流し以て支那全土の人を助けた大功者で

ある。南泉禪師は、雲水僧の胸中にある人我の山、それを一刀兩段して愛泥邪水を眞如法海に注がれた。其の功、大禹に勝るとも劣りしことなし、と賞嘆したのである。

第七句、鍊石補天兮獨賢女媧』是れは趙州を賞讃したのである。天柱摧け地維裂けた時に女媧氏が五色の石を（仁義禮智信）鍊り以て天を補ひ地を安んじたと云ふ古事がある。『趙州は、南泉禪師の公案未だ解決せざる、而も草鞋を頭に戴き死せし猫兒を浮ばせた處は、女媧氏が五色の石を鍊りて缺陷を補はれた、其れと同一である、と云ふ意味。

以下四句は専ら趙州のことである。

趙州老有生涯、』老は尊稱。有生涯、普通の人と違つて活きた生涯をなされた、と賞し、普通の人と違つた其の一例。草鞋頭戴較些々、』些々とは文字上は少し斗りと云ふ事であるが、其の實、十分だと云ふ意である。草鞋頭戴、如何にも子供の戯に似てをる。それが世尊拈華以上、一塵を擧すれば家國隆盛、の力がある。——異中來也還明鑑、』一應は尋常人のなし方と別であるから異中來と云ふ。禪家では異類中行と云うて、異中に行くと、類中に行くとがある。異中は趙州の如き、類中は南泉の如し。』還明鑑、類中は何人でもなし得るが異中は容易でない。その容易でない異中を趙州は容易になされた。故に好き手本と

してお互が明らかに鑑むべきである。

只箇眞金不混沙、』趙州は眞金である故、横拈倒用が平凡に非ず超越的、沙に混すべき金にあらず、平凡僧と同一視すべき人でない、と趙州を九天の上に托した賞語である。』右極めて簡略、或は意旨の通ぜざる處なきにしもあらず。乞ふ、讀み人、注意してお讀みください。——要するに南泉禪師の類中行と趙州の異中行を吟賞したのに外ならず。敢へて云ふ、之是を古人の昔ばなしとせず、或時は南泉となり類中行に、——或時は趙州となり異中行に、大法を擧揚しつゝ、下化衆生、それを忘れてはならぬ。

(昭和十四年六月十日講演)

第六十五則 外道良馬鞭影

◎垂示

垂示云、無相而形、充十虛而方廣、無心而應、徧刹海而不煩、舉一明三、目機銖兩、直得棒如雨點、喝似雷奔、也未當得向上人行履在、』且道、作麼生是向上人事、試舉看、』

讀方

垂示に云く、無相にして形れ、十虚に充ちて方廣なり。無心にして應じ、刹海に徧くして煩ならず。舉一明三、目機銖兩にして、直に棒は雨點の如く、喝は雷奔に似たるを得るも、

也た未だ向上人の行履の在に當得せず。』且く道へ、作麼生か是れ向上人の事なるぞ。試みに舉す看よ。』
字解。

無相、』無相は神の本體、佛の悟境。宇宙萬象の本體も無相である。無相なるが故に如何なる姿も顯る。無相而形と云ふその様子を古人吟じて無一物中無盡藏、有花有月有樓臺、又は無中有道出塵埃、と。

十虚、』東西南北四維上下のこと。無限大を意味す。

無心、』無我即大我。天、無心、——地、無心。——

而應、』萬物を生じ、四時を行す。無我、大我也亦復然り。隨

緣赴感、臨機應變。——

刹海、』刹は陸の義、—— 故に刹海は陸と海のこと。

不煩、』無作の作、無工用の用。聊かも造作の念慮を用ひざる

從容自適底。——

當得、』契合、一致、相當等に相應す。

向上人、』超人的の人物、本分の宗師家。

分解。

無相而形、充_二十虛_一而方廣、無心而應、徧刹海而不煩、』以上は世尊の隨處爲_レ主遇緣即宗底を表し、次の擧一明三、目機鉢兩は外道の英靈底を、直得より行履在までは、臨濟の喝も徳山の

棒も到底及ぶ處に非ずと抑下して、専ら世尊を托上したのである。

提講。

無相にして形_られ、十虛に充ちて方廣なり。是れを平易に語れば左の如し。

天地自然の大神通力は無相にして形る。春になれば自然に柳
緑花紅、—— 夏になれば自然に緑樹青苔。—— 秋になれば
自然に飛花落葉、—— 冬になれば自然に白雪皚々。—— 時
に應じ變に隨ひ、所謂、處々眞處々眞。朱門白屋を問はず、市中
野外を論ぜず、平等にして差別あることなし。是れと同じく、

世尊法爾の大用底も一切の思慮分別を離れ、無我無心の清泉より流れ出づる靈水は喫する人の口に從ひ汲む人の手に任せ、方圓の器に順應して利益を得せしむる。其の功德、廣大無邊である。之是を無心にして應じ、刹海に徧くして煩ならずと示された。——故に舉一明三、目機鉢兩の英靈漢にして棒を使ひ得ること雨點の如く、喝を吐き得ること雷奔の如しと雖も、かゝる(世尊)向上の人の境致には到底及ぶべきものにあらず。若し信ぜざる人あらば去つて本則を看よ。百聞一見に如かず。

◎本則

舉、外道問佛、不問有言、不問無言、世尊良久、外道讚嘆

云、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入、外道去後、阿難問佛、外道有何所證而言得入、佛云、如世良馬、見鞭影而行、

讀方

舉す。外道、佛に問ふ、「有言を問はず、無言を問はず。」世尊良久せり。外道讚嘆して云く、「世尊は大慈大悲にして、我が迷雲を開いて、我をして得入せしめたり。」外道去つて後、阿難、佛に問ふ、「外道何の所證あつてか得入せりと言ひしぞ。」佛云く、「世の良馬の如く鞭影を見て行けり。」字解。

外道、』印度に於て佛教の隆盛なる時代、佛教徒が佛教以外の宗教又は學派を總て外道と云うたものである。』今日や、もすると、此の外道めが、と馬鹿呼ばはりをする外道とは全然意味に於て別である。故に茲では或一派の學者と見るべきである。

有言無言、』有言は常見、無言は斷見。又は有言は肯定、無言は否定。』普通一般の人は常見にあらざれば斷見、斷見にあらざれば常見。有無の二つは何時か離れん。——斷常の二見を簡單に云へば、心身共に永遠なりと確信する是は常見、』心身共に滅盡すると認定する是は斷見。』敢へて心身に限らず、總てに於て斷常の二見は容易に脱離しがたし。

良久、』ヤ、久シと云ふこと。——良久の二字だけでは意味がとれぬ。故に默然の二字を良久の上に添へて讀むべし。默然良久、——さすれば默然たることヤ、久シと云ふことになる。

世尊、』佛陀の異名。異名と云ふより尊稱と云ふべきである。(佛陀尊稱に十號あり。曰く、如來、應供、正偏智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊。) 其の意は人間天上に於て最も尊敬すべき法王と云ふこと。

迷雲、』讀んで字の如く、迷ひの雲。迷雲が眞如の明月を覆ふ。「誰れもみな心の月は持ちながら、浮世の闇に迷ひぬるか。迷雲を拂ふための修行。——」

得入、」悟入のこと。或は開悟。――

良馬鞭影、」經中に、比丘有四馬、一、見鞭影即驚悚隨御者意、二、觸毛後如驚、三、觸肉、四、徹骨肉方覺、」とある。鞭影を見て走るは良馬の本性。――

分解。

不問有言、不問無言、」簡単に云へば所謂四句を離れ百非を絶して一句作麼生である。然るに此の外道は尋常のザラにある普通一般の學者と思ひの外の外道である。故に斯くの如き質問を提出した。

流石、世尊である。棒を拈せず喝も下さず、只默然良久。――

此の默然良久こそ世尊にあらざれば爲し得ざる妙藝である。

外道、讚嘆云々、」尋常一様の外道にあらざる證據は是れだ。

阿難問佛云々、」是れは阿難の自白。偽らざる所に阿難の面目が流出してをる。

佛云如世良馬云々、」世尊の大慈大悲、無心にして應ずる底。

提講。

茲に釋迦如來と或哲學者との問答がある。修行者の參考資料となすべき好這のお手本。

果して然るや否は別問題として、衲が外道の意中を忖度するに、現に法幢を建て宗旨を立て、御座る釋迦は如來と雖も同じ

人間である、敢へて恐るゝにたらず、彼をして一泡ふかせて見よう、と云ふ心で、有言を問はず無言を問はず、と一矢を放つた。若し釋迦が此の問ひに對して何とか云うたら、イヤそれは有言で御座る、私はそれは問ひません。——若し此の問ひに對して何とも云はなかつたら、イヤそれは無言で御座る、私はそれは問ひません。——要は釋迦をして如何ともなし得ざる閉口頓首底を見ようと思つて、胸中に毒を藏しての問ひである、やに思ふ。

圓悟禪師は、雙劍倚空飛、と着語なされた。如何にも有言を問はず是れ一劍、無言を問はず是れ一劍。以上の兩劍を同時に

釋迦の胸字を目がけて突き出した。可謂、禍事々々と。——
釋迦にあらざれば即死だ、然らざれば頓首百拜。——

流石、人天の大導師たる釋迦は、外道が有言を問はず無言を問はずと云ふものゝ、やはり有無の見に擒はれて居ることを一見辨見なされた。故に釋迦は良久、——何とも云はず暫く默然たり。——無相にして無心、——此の無相が十虚に充ち、此の無心が刹海に徧し。——知るべし、釋迦の良久底には釋迦もなければ良久もなし。——されど之是の良久、大火聚の如し。等閑に觸著すれば火星飛ふ。——圓悟禪師、世尊の良久に向つて、其の聲雷の如し、と。(雷と云うても、お互が耳に

聞く寒暖電気衝突の雷と思ふ勿れ。其の働き、其の轟きの極めて廣大なることを表したのである。）圓悟禪師、重ねて曰く、坐者立者、皆動他不得、と。如何にも世尊の如きはテコでも棒でも動くものか。煮ても焼いても喰へるものか。盡乾坤、盡十方、法界一個の世尊。揺がすものも動くものも、喰ふものも喰はるものも、唯之是だ。——試みに諸君に問ふ、今茲に人あり、來つて、有言を問はず無言を問はず、と問うたら何と答ふべきや。世尊は良久せり。お互は何と。——徳山禪師ならば無論棒だ。臨濟禪師ならば言ふまでもなく喝だ。お互は何と。何れにせよ問者をして安心せしむれば其れでよし。」幸に未だ曾て、

有言を問はず無言を問はず、と云ふ難問を衲（なま）の處へ持込みし人なし。されど、是非とも尼僧にして、と依頼せる婦人があり、又、是非とも弟子にして、と懇願せる男子がある。是等の人に向つて棒も不可、喝も不可。況んや良久に於てをや。不幸にして年に三回や四回は必ず斯くの如き人に訪問さるゝ。有言を問はず無言を問はず、と問はるゝより一層答辯に窮します。敢へて手柄を披露するにあらざれども、その都度問者をして多少の安心を得せしめます。多少の安心でありますから、本則の外道の如く大慈大悲、我迷雲を開き、我をして得入せしむ、とまで謝言は述べませんが、お蔭様で少々安心が出来ました位の言

は残して歸ります。閑話休題。

世尊の良久を外道は如何に得入したか。茲が眼目である。茲が研究すべき處である。眞箇の得入は、得不得、入不入。此の入不入、此の得不得に徹底すれば不得即得、不入即入である。言ふことは易く脱體は難し。妙味は自己自身が實參實悟して知るべし。兎に角、外道は得入したものと見える。圓悟禪師、下語して曰く、「伶俐の漢、一撥オチ便ち轉ず。」と。眞に然り。衆生本來佛である。一念の迷ひが凡夫、一念の悟りが佛。斧頭元是鐵、波を除いて水なし、波是水。——外道も心機一轉すれば我家の人。聞く、釋迦如來の弟子は何れも始めは外道、それが心外

無法、三界唯心と悟つて弟子となつたのである。此の本則に出頭したる外道、果して心外無法、三界唯心たる其の妙處を吞却したものと見える。——以上で世尊と外道の問答は相濟んだ。外道去後、阿難問佛。阿難は釋迦常隨の弟子。三十年間、日々の説法を悉く聽聞し、それを皆諳記して一つも失念せず、と云ふ傑物である。』されど釋迦在世の中に大悟することが出來ず、釋迦滅後、法兄の迦葉に提撕せられて始めて得入された。斯くの如き次第であるから、今の處、外道と世尊の問答は到底わかるはずはない。故に佛に問うて曰く、「外道、何の所證ありて得入すと云ふや。」と。阿難の目で見た處では、有言を問はず無言を問

はずと云ふに對して世尊は良久。それを一見して大慈大悲云々と云うて拜禮し去つたから、阿難には如何にも不思議。狂人と狂人の立會ひ同様。阿難としては質問せざるを得ず。敢へて阿難のみにあらず。お互も第二の阿難で、世尊と外道の問答は實際何の意味であるか不得要領である。世尊現在せば一問を試みざるを得ず。——現今、或人の如きは世尊の良久はしかく、外道の得入は是れくくと輕々に看過なさるが、それは輕々に看過なさる人の良久、得入で、眞箇世尊の良久、外道の得入に非ず。阿難の如きは法に於て親切。知らず解せざるが故に我見を放外して質問に及んだ。お互も知らざることは三歳の童子と

雖も敬むて問ふべし。聞くは一時の恥、聞かざるは末代の恥。」

佛云く、「世の良馬の如く鞭影を見て行けり。」と。之是を無相にして形かたはれ、無心にして應ず、と云ふべし。大慈大悲、世尊の如き人にあらざれば、かゝる血滴々の教訓は出來ぬ。意味は、ウー彼の外道は仲々の機敏家、拙僧の良久を一見して合點した、如何にも伶俐の漢だ。——此の處へ、圓悟禪師、「且道、喚什麼作鞭影。」と着語された。而して更に打一拂子。」拂子を以て打つこと一下、是れが圓悟禪師の鞭影。阿難、世尊の垂示で得入せしと思ひの外、因縁未だ熟せざるがために得入する能はず、残念々々。——

◎頌

機輪曾未轉、轉必兩頭走、明鏡忽臨臺、當下分妍醜、妍醜
分兮迷雲開、慈門何處生塵埃、因憶良馬窺鞭影、千里追風
喚得回、喚得回、鳴指三下、』

讀方

機輪曾て未だ轉ぜず、轉ずれば必ず兩頭に走る。明鏡忽ち臺
に臨み當下に妍醜を分てり。妍醜は分れ、迷雲は開けたり。
慈門何れの處にか塵埃を生ぜん。因つて憶ふ良馬の鞭影を窺
ふことを。千里の追風喚び得て回さん。喚び得て回さん、指
を鳴らすこと三下して。』

字解。

機輪、』古人云く、「機は乃ち千聖の靈機、輪は是れ從來已本諸
人の命脈なり。」と。要するに諸佛も衆生と俱に本來具有してを
る所の本心本性のことである。垂示にある無相にして形れ無心
にして應ずる底、それである。一口に云へば絶対の眞理。――

轉必、』前句の理由を示したものの。未だ曾て轉ぜずとは云ふも
の、時に依り處に應じて必ず轉ず。なぜなれば死物にあらず
活物であるから。――

兩頭走、』是とか非とか、有とか無とか、又は迷とか悟とか、
生死とか涅槃とか、相對となり第二義門となる。

明鏡臺下、明鏡は世尊に喩へたもの。外道が世尊の面前へ出れば、自己の妍醜、如何に覆藏しようと思つても覆藏し得ざるを云ふ。

慈門、世尊の下化衆生の甘露門、何者でも轉迷開悟せしむる。

塵埃、尋常のチリ、アクタではない。不成功、不成就、不出來、不満足の意。

因憶、それに就いて呼び起す、又記憶を想ひ浮べる。

追風、良馬の名。秦の始皇七頭の愛馬中、その優等なるもの。

鳴指三下、斥けること、相手にせぬこと。種々の異説があるが今は略す。

分解。

機輪曾未轉、天地一枚の大法、宇宙一個の眞理、そのまゝそれで四時行はれ萬物となる。長者は長法身、短者は短法身。

轉必兩頭走、妄をも斷せず眞をも求めず、其のものそれを一轉すれば頭上の頭、其の過まりたるや知るべし。但し轉に二轉あり。悟處より轉ずる、是れを好轉と云ひ、迷處より轉ずる、是れを惡轉と云ふ。悟處より轉ずるは無相にして無心、迷處より轉ずるは有相にして有心。好轉は聖者の下化衆生、惡轉は凡

夫の我利我慾。

明鏡忽より分妍醜まで、「世尊と外道の對談底。」

妍醜分云々、「外道の悟處。」——慈門云々、「世尊の法力。」

因思云々、「外道を讚賞したもの。」

千里云々結句まで、「雪竇禪師の見識。」

提講。

機輪曾未轉、轉必兩頭走、之是の二句で本則の要處を頌じ盡せり。

學者の着目すべき點は轉不轉の二字にあり。畢竟、轉ぜざるも眞理であり大法である。轉ずるも亦大法であり眞理である。

然るに多くの人は轉不轉を二様に見る。故に不得要領に終る。試みに轉不轉を譬へて以て是を示さん。花が咲く、葉が散る、それは轉である。

されど、咲く花は咲く其のまゝが花の本分、散る葉は散る其のまゝが葉の本領。その本分本領は未だ曾て轉ぜず。故に轉ずるまゝが、不轉、不轉のまゝが轉である。——世尊は世尊のまゝ、外道は外道のまゝ、それが世尊の本領にして外道の本分。曾て未だ轉ぜざる處。

然るに有言を問はず、無言を問はず、それに對して良久。是れが轉じて兩頭に走りし處。——敢へて正眼に見來らずとも轉

にいて而して不轉、不轉にいて而して轉ずる所以が、ヤ、分明である。その轉而不轉、不轉即轉の當體を第三、四句に、明鏡忽臨臺、當下分妍醜、と吟じられた。無論、明鏡は世尊、——妍醜は外道。——明鏡云々の處へ圓悟禪師下語して曰く、「釋迦老師を見るや。」と。釋迦如來の釋迦如來たる眞面目が見えたか、と一拶。

重ねて、「破や破や、敗や敗や。」と。明鏡と云ふだけ不明鏡、臨臺と云ふ、それが失敗、——と云はるゝが、果して破か、果して失敗か。誤まつて定盤ぢやうばんの星を認むる勿れ。當下云々の處へ、圓悟禪師、盡大地眞箇解脫門、必ずしも釋迦如來には限る

まい。隨時隨處に於て妍醜を分つことが出来るはずだ。拙僧なら良久でなく、三十棒を與へ使はず、と祖師禪を拈出された。外道は迷雲を開き、世尊は埃塵を生ぜず、と雪竇禪師は讚賞さるゝが、果して外道は迷雲を開いたか、果して世尊は埃塵を生ぜざりしか。徒に人の胸宇を忖度する勿れ。——如かじ、自己の迷雲は、自己の埃塵は、それ／＼が先決問題である。

世尊、阿難の問ひに對して、外道は穎敏、良馬の鞭影を見て走るが如し、と云はれた其の言葉に因み、外道を到頭、馬にしめてしまはれた。外道こそ大迷惑、されど今となつては如何とも

なしがたし。

因憶云々が馬にした實證である。千里追風喚得回、是れは雪寶禪師の勘定。果して世尊が雪寶禪師の勘定通りでありしや否やは大なる疑問。——雪寶禪師の意は、一日に千里も走ると云ふ俊發の外道である、過まつて惡道に入らば大變、故に世尊、良久を以て彼の頭を善道に回らした、と。其の眞僞は親しく世尊に相見して拜聽する外はない。圓悟禪師は喚得回と云ふ處へ、轉身即錯、敢へて身を轉ずるには及ばぬ、外道は外道で進め、と云はるゝが、大いに深意のあるあり。——

結句の、喚得回鳴指三下、是れは雪寶禪師の大機大用。千里

の追風に向つて最後の一句である。茲の處へ、大内君は左の如く云うて居らるゝ。

元來諸法住法位、世間相常住である。花は紅に何の不足がある。柳は綠に何の不滿がある。然るに若し花を綠に喚び得て回らしめ、柳を紅に喚び得て回らしめたら、それこそ天地の變動である。今も亦其の通り。外道に何の不足があつて佛道に得入する。若し外道の捨つべきあり佛法の取るべきありと云はるゝ、既に是れ第二第三に落在。故に雪寶は、回らさば指を鳴らすこと三下、と云はれた。——斯く云はるゝ、それが第二第三に落在である。——眞箇此事を我が物にした人は、千佛萬祖、一時

396
485

に出頭し來り、喚べども招けども驚直に去つて敢へて首を回らさず。昔時或は恁麼いんまの人あり、今時恁麼いんまの人なし。嗚吁末世なるかな、末世。——鳴指三下、茲では嫌厭の意である。——

(昭和十四年七月一日講演)

昭和十四年十一月七日印刷
昭和十四年十一月十四日發行

著者
發行者
兼
兼

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考查課

終